



六花

5

2020

りっかはいくかい

山田六甲 初蝶 紳

待賢門院 (その六)

目を刺され痛くないメス春の昼
日本人は右へならへ染井吉野
こんな時呑みにゆくのか山桜
明け方は喘息三昧春の夢
夜遅く寝てこそ甘し春の夢
回廊に貼りつき春の濡落葉
信心を起こさば花の雨嵐
花の雨誤植せしこと赦されて
佐津さんのお別れ手紙花万朶
初蝶のちらちら夢のこま送り
空笑て地上に墮しひばりかな
地に戻れ雲雀の空の崩れしよ
雨急に揚がる途上の雲雀かな
惨憺たる百鬼夜行や亀の鳴く
印南を菜の花雲が走りけり
風邪怖いか枝垂桜の厄神さん
柏餅あそこと決めてをりにしを
句会なくて待賢門院落つばき

涅槃西風 笹村 政子

雪嶺抄

老梅の朝一番の匂ひかな
たらの芽に伸ばしたる手の届かざる
鳥ごゑの森の奥へと枯れゆけり
存分に倒す背もたれ春立ちぬ
早春の風の匂ひの聞こえ来し
河馬の眼にさざ波寄する春の水
草萌にあそぶわが影濃く淡く
父の忌の春の入日を車窓より
お社の絵馬を躍らす木の芽風
楼門を海に抜けたり涅槃西風

志方 章子

落の臺

蟋蟀抄

紅梅の咲き初めきたる海昏し
紅梅や紺碧の海一望す
大風に関はりあらず梅紅し
川の音聞いてをりたる落の臺
春隣肌刺す風でありたるも
寒卵産みしばかりをてのひらに
やり切れぬ色でありけり木瓜の赤
雪踏んで細き道筋つけてやる
老いてこそバレンタインの贈り物
煮凝りや思ひ起せる母のこと

はまなす抄 日脚伸ぶ 升田ヤス子

寒鯉のゐると夫言ふまた言へる
すれちがふ人の笑顔や冬木立
臘梅の傷める寺の耕衣の碑
満開の梅より鳥の浮きあがる
散瞳の目の家路なり日脚伸ぶ
下の名で呼びあふ門徒報恩講
冴返る被災せざるは答めきて
客問拭く春水かたく絞りては
閑伽桶に春の水とて溢れしむ
携帯をさがす携帯春寒し

山稜抄 涅槃会 藤生富士男

涅槃会の読誦にまじる嗚咽かな
鳥雲に澄雄生家はこのあたり
冬蜂に大いなる刻来りけり
足元に来たりて消ゆる春の雪
うすらひの溶けゆく水のありにけり
枝川の曲がりきたれる雪解かな
春水の地にも影のゆらめけり
ぶらんこに水平線のゆらめけり
蜥蜴出て身を反る術をおぼえけり
春灯の渚に寄する近江かな

雪卿集 せつけいしゅう

善野 行

住田千代子

小夜しぐれ古都に馴染の店に入る
藪瘦せて寒々延ぶるレールかな
一輪の日溜となる寒椿
冬山に日は膨れつつ入りにけり

藍那集落

山眠る百戸平家の隠れ里
谷暮れて紫紺に冴ゆる月と星
玉垣の内の祠に寒燈
若狭井の閉しや春を待つところ

枯荻の汀の岩の白さかな
松籟へとんどの煙吞まれけり
目の中に点と燃えゐるとんどの火
庭の木の影さわぎたる白障子
嘎れこゑを発し飛びゆく寒鴉
炬燵出て余所行き顔となりけり
寒の空破つて来たる鳶一羽
日脚伸びミシンの音の確かさよ

永田万年青

出口 誠

寒落暉空を焼きつつ闇になる
冬川の波紋静寂の闇に消ゆ
赤鬼の屋根に見下ろす節分会
福豆のひとつもとれず老いたりき
愛想良き鬼福豆を撒いてをり
春の川底の小石を磨きけり
川沿ひを駆けてゐる子よ春の水
川縁に鳥の並べる日向ぼこ

父のくせ直してみたき春の宵
春の宵ごはんのとり方教へらる
赤き梅わずかの枝に咲いてをり
菜の花の整列したる畑かな
真つ直ぐの枝に咲きたる白き梅
このくせは治ることなし春の昼
テーブルにワイン広がる春の昼
春の昼子供と食べるビスケット

谷口一献

田尻勝子

草餅の四季の切絵の包みかな
倒し置く空の徳利や春浅し
春立つや庭へ出てみただけのこと
店の灯を撥ね返しぬる細魚かな
福の字のはみ出してゐる福茶かな
雲流る川面に垂れる梅白し
ぼつちやりとフレアスカート風光る
大の字に寝てうららかや妻の留守

源平の世にも流れて春の川
細波の光の音や春の水
桜木に光の帯の駆け登る
水に漬く木の枝の下の番ひ鴨
蓬生ふ木の元に犬尿をする
千代川の石咬む流れ青き踏む
臘梅の匂にソファ一乗取られ
踏み鳴らす廻廊青と赤の鬼

夢風撰巻頭

大の字に

寝てうららかや

妻の留守

谷口一献

大の字に寝るとは何も考えず心配なく両手を広げ足をひろげて一時的に仰向いて寝ること。
自堕落になれば涼しき昼寝かな 宗次『猿蓑』撰の時、宗次一句の入集を願ひて、数句吟じ来たれど、
取るべきなし。
一タ、先師の「いざくつろぎ給へ、我も臥しなん」とのたまふに、宗次も「お許し候へ、じだらくに寝れば涼しく侍る」と申すに通うか。

雪樹集

平居 濤子

延川五十昭

秘めやかに古墳の椿色をなす
鎮まれる黄鐘調や春の寺
母の忌や紅白の梅並び咲く
道真忌墨痕にじむ漢詩かな
盆梅の鉢に忘れし花鋏
土雛を飾りて孫の誕生日
山毛櫨の芽の虹色になる夜明かな
探梅や鼻の欠けある不動像
雪道が無様に下る母を待つ
流し雛水面に映る妻の顔
立枯の樹々を悼めば風花す
白梅や蔀戸閉ぢて行者堂

延川 笙子

廣畑 育子

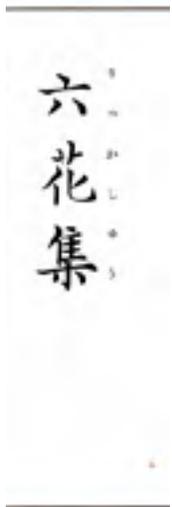
護摩行や父の面影かぎろへる
松林春の光の溢れけり
日脚伸ぶ美豆良の長き大師像
寒の明シーソー動き出す朝
大鷲の見下ろす疎水亀の鳴く
ゆりかもめ水面に無垢の影おとす
火渡りの裸足の人の厚衣
紅梅のたんと自転車籠にかな
春蝶のどこか似てゐる薬師像
側車行く海岸通風光る
雪柳床の間に挿し道真忌
蜜柑の筋丁寧にとる孤独かな

大内 幸子

江見 巖

水溜めに青空返し露の臺
此の所異常氣象に梅白く
炬燵猫主亡くして迷ひ猫
真つ直ぐに香煙立ちて寒明ける
如月や静かな雨のミニ喫茶
下萌や転ばぬやうに小買物

吸呑の母の使ひし梅の花
豆撒や妻より強きものなし
立春や投網かからぬ魚の色
寒明や頁に栞はさみけり
水分の隠れて流る建国日
ピアスする男のバレンタインの日



磯野青之里

「荒ぶる」の歌は涙にラガーマン
初場所や肌つや若き勝名乗り
恵方巻丸ごと飲める河馬の口
生涯を一捕手として散椿
群衆の口元隠すマスクかな

菊谷 潔

中御門 出

連雀の群れて飛び立つ表うら
寒風の路地なつかしきさんさがり
蓑虫に生暖かき寒の風
雪雲の流れつ春の立つ目かな
季のさかひ梅は自在に風まかせ

節分の目に見えぬ敵鬼笑ひ
節分や朝は素顔をかくす妻
福は内干してありたる鬼パンツ
節分にまだ見当たらず特効薬
節分やまだまだ元気鯛焼く

田尻 勝子

源平の世にも流れて春の川

平居 淳子

秘めやかに古墳の椿色をなす

延川五十昭

道真忌墨痕にじむ漢詩かな

生田川であろうか。平家物語・巻九の源平の合戦にも出てくる生田川は新神戸駅からJR三宮駅に向かって大きな通りになっているが、昭和42年の大水害のときは激流となって下水管の鉄蓋が十メートルほど吹き上がってその上を通っていた女の子がふきとばされる事故が起きた。昔の生田川である。源平合戦の時代にもその流れはあった。作者はその水の流れと歴史の流れを見て往時を偲んでいるのである。

秘めやかとは「内におさえて人目に立たないようにするさま」であるが、何かエロスを秘めたような色の椿を思い起こさせる。枝に咲いているよりも落ちた椿の方が秘めやかさを纏うようだが、掲句のように古墳に咲いた椿は時を遠く超えて古代の秘めやかな世界が地中から湧きだしてきた古代の秘密の色のようにも思える。ふと古墳の主はどのような人物だったのだろうかと思像が膨らむ。

道真は醍醐朝の右大臣にまで昇りつめた。しかし謀反を計画したとして、大宰府へ左遷され現地で没した。死後怨霊と化したと考えられ、天満天神として信仰の対象となる。『怨霊とは何か・菅原道真・平将門・崇徳院』（中公新書より）。現在は学問の神で漢詩人でもあった。そのことを偲んで怨霊を慰めるために詠んだのであろう。延川五十昭は中国文化に詳しく何度も中国を訪問している。

延川 笹子

日脚伸び美豆良の長き大師像

廣畑 育子

蜜柑の筋丁寧にとる孤独かな

美豆良（みずら）は長くのばした頭髪を左右に分けて両耳の付近で束ね、垂れた髪を輪に巻いて紐で結んだものである。掲句最初は勘違いしてはて？ と思っただが、大師は「だいし」でなく「たいし」と呼ぶのだと悟る。聖徳太子のことである。聖徳太子については諸説あつてはつきりしないが『古事記』（712年）では上宮之厩戸豊聡耳命（かみつみやのうまやとのとよとみのみこと）、『日本書紀』（養老4年、720年）では厩戸（豊聡耳）皇子のほかに豊耳聡聖徳（とよみみさとしようとく）、豊聡耳法大王、法主王、東宮聖徳と記されていて、諸説あるなぞ多き太子だが、仏教を日本に広めようとしていた

ことで知られているし、昔の一万円の肖像でも知られている。掲句は加古川の太子ゆかりの鶴林寺でのものだろう。日脚が伸びて太子像のミズラを照らしている光景。太子のミズラの輝きに日本が明るくなればいいのに、とう願ひも込めて詠んだのであろう。

人は孤独で無聊を託つとき、どのような行動をとるのだろうかと思像する。育子の場合は普段は取りもしないミカンの白い筋を丁寧に取りついているのだ。取りながら、つくづく孤独だなあ、という思いがふつふつと湧いてくる。

一方孤独に苛まれるときには、皮ごとミカンを丸呑みするかのような行動にも出る。孤独の極みの時には俳句に打ち込むのだろう。俳人は吟行したあと推敲を重ねていると時間を忘れているときがある。育子のような素敵な人を孤独にさせる者は地獄へ堕ちる。